

農業技術情報

令和8年8月19日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所	015-572-3128
JA幕別町	0155-54-4118
JAさつない	56-2131
JA帯広大正	64-4591
日甜幕別原料事務所	54-2756
幕別町農林課	54-6605

★各作物の生育・作業の遅速（幕別町8月15日）（ ）内は平年値

作物名	遅速 日数	生育および作業状況	生育期節
馬鈴しょ	早4	茎長 54.1 (73.6)cm 茎数 4.0 (3.7)本/株	茎葉黄変期 8/4 (8/8)
大豆	早4	茎長 78.3 (76.0)cm 葉数 9.7 (9.7)枚 着莢数 541.1 (495.9)個/m ²	
小豆	遅3	茎長 73.4 (61.4)cm 葉数 11.0 (11.9)枚 着莢数 165.3 (203.5)個/m ²	開花始 7/25 (7/22) 開花期 7/28 (7/25)
菜豆（金時）	早3	茎長 54.2 (54.2)cm 葉数 4.0 (4.1)枚 着莢数 185.7 (170.5)個/m ²	
てん菜（移植）	早4	草丈 81.5 (69.0)cm 葉数 29.9 (29.8)枚 根周 38.3 (36.8)cm	
てん菜（直播）	早5	草丈 69.6 (62.1)cm 葉数 25.0 (23.5)枚 根周 28.9 (27.2)cm	
牧草（2番草）	早2	草丈 85.4 (83.4)cm	
飼料用とうもろこし	早2	草丈 308.2 (305.8)cm 出葉数 18.0 (17.9)枚 稈長 277.5 (273.1)cm	絹糸抽出期 7/25 (7/27) 乳熟期 8/ (8/19)
ながいも	遅4	調整長 29.1 (32.3)cm いも重 286.4 (410.5)g いも径 42.4 (47.1)mm	
たまねぎ	早4	球径 8.1 (7.5)cm	倒伏期 7/28 (8/2)

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。
薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

畑 作

<秋まき小麦>

高収量・高品質の小麦づくりは、適期適正は種からスタートします。根張りが良く強い株を均一に作るために、過湿時には種床準備は避けましょう。また、種子伝染性病害や土壌病害の発生リスクを最小限にするために土の移動に注意し、消毒済の購入種子を使用しましょう。

1 は種に向けて

- ・透排水性の劣るほ場では、心土破碎などにより耕盤層を改善しましょう。
- ・は種前に必ず土壌酸度を測定し、pH5.5 以上を目標に酸度矯正をしましょう。
土壌サンプルの持ち込みと問い合わせは、JA・普及センターで行っています。

・銅欠乏症状の出やすい土壌(腐植の多い火山性土等)は、銅の補給が必要です(Cu 入り肥料等や堆肥の施用)。ただし、その際には過剰障害を防ぐため、土壌診断値に基づき、適正量を施用しましょう。

<てんさい>

1 「褐斑病」「ヨトウガ」の防除

日甜ハガキを参考に、いずれも散布水量120ℓ/10a で防除します。

表1 8月中下旬以降の防除薬剤例(褐斑病・ヨトウガ)

防除時期	病害虫	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)
8月18日～20日	褐斑病	ホクガード乳剤(混用) + マンゼブ剤	3	1,000	14日	2回
			M3	400	21日	5回
	ヨトウガ	ブロフレア SC	30	4,000	7日	3回
		ディアナ SC	5	5,000	前日	2回
9月1日～3日(最終)	褐斑病	グリーンダイセン M 水和剤 または グリーンペンコセブ 水和剤	M3	400	21日	5回

<ばれいしょ>

1 「塊茎腐敗」「軟腐病」対策

生育後半の疫病、軟腐病発生は塊茎腐敗の原因となります。収穫までの日数や病害の発生状況に応じて薬剤を選定し防除を継続しましょう。

※薬剤は 7/17 付技術情報参照(疫病)、8/1 付技術情報参照(軟腐病)

2 収穫時の注意

- ・収穫作業は茎葉枯凋処理から7～10 日後に、いもの皮むけが生じないことを確認して、晴れた暖かい日に行いましょう。また、茎葉枯凋後7～14 日以内に収穫しましょう。
- ・収穫が早すぎると、収量、でん粉価の減少、皮むけなどの障害が発生する可能性があります。
- ・収穫が遅れると、黒あざ病菌核の増加や、腐敗、緑化等品質の低下が懸念されます。
- ・掘り取り後は腐敗を防ぐため、風乾を十分に行ってください。
- ・選別時や網コン等への投入時には、傷、打撲などができないように注意しましょう。
- ・高温時の掘取りは品温が上がり、貯蔵後の腐敗に繋がるので注意してください。

※茎葉処理方法については 8/1 付農業技術情報参照

<豆 類>

1 「マメシクイガ」「カメムシ」の防除(大豆)

まだ 2 回防除していない場合は、収穫前日数に留意しながら適期に防除します。※防除方法は 8/1 付技術情報を参照。

2 「インゲンマメゾウムシ」の防除(金時、手亡)

インゲンマメゾウムシの成虫は、7月下旬以降に出現し8月上旬～9月上旬に発生が見られ、成熟の早い菜豆が被害を受けやすくなります。防除時期は下記を目安にしてください。

- ・金時の防除時期: 莢の色が抜け、白莢が見える時期(8月中旬～)
- ・手亡の防除時期: 子実が大きくなり莢の色が抜け、白莢が見える時期(8月下旬以降)

表2 インゲンマメゾウムシの防除例

防除回数	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
1回目	バイスロイド乳剤	3A	2,000	7日	3回
2回目	ダントツ水溶剤	4A	2,000	前日	3回

※1週間ごとに2回防除する

※莢全体に薬剤がかかるよう、散布水量は多めとする

＜収穫から保管時の注意事項＞

- ① 成熟期以降は早めに収穫する。
- ② 収穫した豆は速やかに出荷し、必要以上の長期間の保管は避ける。
(は種時に余った種子は、適正に処分する。豆の一時保管場所を清掃し、餌となる豆を一年間残さない。)

3 「アブラムシ類」「アスキノメイガ」「ハダニ」「カメムシ」の防除(小豆)

発生が見られた場合、収穫前日数に留意しながら適期に防除します。※薬剤は7/17付技術情報参照

4 「菌核病」「灰色かび病」防除(小豆)

既に3回防除していても発生が見られる場合、収穫前日数に留意しながら適期に防除します。※薬剤は8/1付技術情報参照

5 金時の収穫

ほ場ごと登熟状況と天候を考慮し、収穫方法に応じた適期収穫と乾燥調製に努めましょう。

収穫が早すぎると、へこみ・つぶれ粒が発生しやすくなり、収穫が遅れると色流れ粒・裂皮・割れ粒が発生しやすくなります。収穫時には収穫機械、脱穀機の調整を確認するようにしましょう。

○ピックアップ収穫

- ・収穫・脱穀適期: 完熟期(熟莢率100%、成熟期から3日後～6日以内)
- ・作業速度: 0.7m/s以下
- ・倒伏程度によらず収穫が可能(ビーンハーベスタまたはビーンカッタ)。

○ダイレクト収穫

- ・収穫・脱穀適期: 完熟期(熟莢率ほぼ100%)から6日以内
- ・作業速度: 0.6～0.8m/s(総重量700g/m²以上では0.6m/s未満)
- ・倒伏が見られるほ場では、作業機の速度は0.5m/sで収穫してください。
倒伏が多いほ場では追い刈り収穫を行ってください。

脱穀時は子実水分を考慮し、こぎ胴の回転数を調整します。26%以上の高水分では押傷・つぶれ粒が多発し、18%以下の低水分ではこぎ胴が低回転でも裂皮粒が多発します。また、適水分(19～23%)でも 300 回転以上では損傷粒が発生します。

野 菜

<ながいも>

1 強風による「つる切れ」防止対策

茎葉量が最も多い時期です。強風などによる「つる切れ」防止のため、支柱の補強やネットの「たるみ」の点検や補強を行ってください。

2 トレンチャー溝の陥没

ほ場の陥没は、「滞水」や「奇形いも」の発生の原因となります。地上部の陥没が見られなくても水の流れなどで地下部に空洞が発生する場合があります。特に入口付近に陥没が見られた際は早期に通路の土で埋め戻すようにしてください。

3 アブラムシの防除

アブラムシの発生量が多い場合は、必要に応じて防除を行ってください。

～土壌診断を活用しましょう～

土壌診断を実施し、適切な肥料選定をすることで、養分バランスの適正化とコスト節減に活用しましょう。

「リン酸」・「カリ」の蓄積が進んでいるほ場が多い傾向にありますので土壌診断に基づき、適切な施肥設計を行いましょう。

～農薬の安全使用と農作業事故防止に努めましょう～

例年、夏から秋の収穫時期に事故が多くなります。特にハーベスタによる「挟まれ・巻き込まれ」の事故に十分注意しましょう。

- ★「だぶつき」のない格好で作業しましょう。
- ★選別部に物が詰まった場合は、必ず回転を止めてから除去してください。
- ★機械走行中の飛び乗り、飛び降りは絶対にやめましょう。
- ★機械周辺では、声を掛け合って事故防止に努めましょう。
- ★こまめな休憩や水分補給をおこない熱中症対策に努めましょう。